

つるぎ町一字の生活構造と生活意識について

社会班 (徳島社会学会)

長澤 寛二^{*1} 桂 啓人^{*2} 近藤 孝造^{*3}

要旨：一字住民の生活構造や生活意識をアンケート調査により分析した。一字の過疎化、住民の高齢化は著しく進んでいる。施策面でも、いわゆる重度の過疎化・高齢化を前提とした施策を慎重に吟味していく必要がある。生活意識においては、老後が経済的に安定し豊かであることが自己肯定感を高めている。一人暮らしの生活形態は、やはり自己肯定感を高く保つことを困難にしている。信頼できるコミュニティー（友人・近所）の存在は自己肯定感を高めているので、行政の重点目標に設定できるのではないかと考えられる。合併前の期待と合併後の評価の比較では、道路の整備に対する関心が高く、期待も評価もなされているといえる。

キーワード：高齢化、生活構造、生活意識、市町村合併、自己肯定感

1. はじめに

21世紀に入り、「平成の大合併」によって全国各地で市町村の合併が進み徳島県においても、平成17年3月1日、3町村が合併してつるぎ町が誕生した。これにより旧一字村（以下では「一字」と表記する。）は行政単位としては存在しなくなった。一字は、面積97.88km²、人口1,068人（男495人、女573人）、全世帯数594世帯、人口密度10.91人/km²の過疎化の著しい山村である。我々の11年前の調査では県内50市町村中第一位の過疎地域であった⁽¹⁾。

本論文では、住民へのアンケート調査により、まず典型的な農山村である一字の住民の基本的・客観的な生活像を示した。

次いで、一字の人々がどのような「生活構造や生活意識」の下に暮らしているかを調べた。

更に、過疎化・高齢化にさらされている一字の人々が肯定的に生きていくための要因を探った（これを「自己肯定感」と表現する）。

最後に、今回のアンケート結果と、5年前に美馬

郡合併協議会によって実施されたつるぎ町の住民アンケート「新町まちづくり計画」（以下では「まちづくりアンケート」と表記する）の結果とを比較しながら、合併前の期待と合併後の評価の違いを見た。

2. 調査の概要

1) 調査実施概要

調査はつるぎ町の協力により、全世帯（594世帯）への訪問調査（留置法）で実施した。この調査の実施概要は表1に示したとおりである。

回収率は52.5%であり、全世帯調査としては高くはない。この背景として、対象者に高齢者が多いので

表1 調査実施概要

調査地域	徳島県美馬郡つるぎ町「一字」
調査対象	全世帯への訪問調査(留め置き法)
標本数	594
調査方法	全世帯への訪問調査(留め置き法)
調査期日	平成22年6月
回収標本数	312 (52.5%)

*1 徳島県立徳島商業高等学校

*2 徳島県教育委員会学校政策課

*3 徳島工業短期大学

表2 年齢層別人数割合

	人数(人)	割合(%)
向老層(55歳～64歳)	47	17.3
高齢層(65歳～74歳)	88	32.4
後期高齢層(75歳以上)	137	50.4
合計	272	100

住民票があっても病院、老健施設等に入居して不在であったり、在宅者の場合でも病気などで回答できない者も少なからず含まれていたことと推測される。

2) 調査対象者の属性

調査対象者の属性について、以下に示す。年齢層別としては、44歳以下が14名、45歳から54歳までが26名いたが、分析対象者を55歳以上としたため不明者1名とともに分析対象から除外した。

次に、55歳から64歳以下を向老層、65歳から74歳までを高齢層、75歳以上を後期高齢層とした。調査票回収数312票の内、分析対象票は272票となり、向老層は17.3%、高齢層は32.4%、後期高齢層は50.4%であった(表2)。

分析対象とした人をグループごとに加算平均して推測したおおまかな平均年齢は63.6歳であった。一宇の高齢化がいかに進んでいるかが示されている。

(1) 性別

調査対象者の男女比は、全体では男性48.9%、女性51.1%であった(図1)。

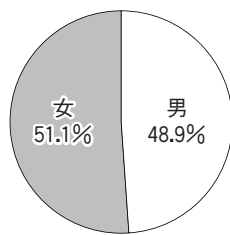


図1 性別

(2) 職業

職業に関しては、全体では「無職」が60.1%で最も多かった。以下「農林業」が25.1%、「非農林業」

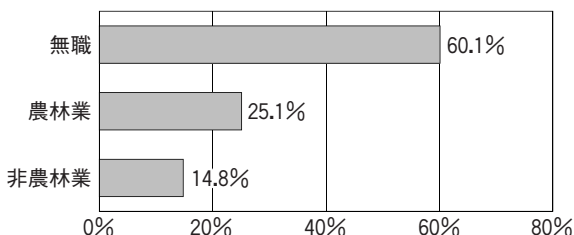


図2 職業

が14.8%の順であった。高齢化に伴い「無職」との回答が多いのが目につく(図2)。

(3) 暮らし向き

暮らし向きに関しては、全体では「どちらとも言えない」が50.0%で最も多く、以下「豊かではない」が44.8%、「豊かである」が5.2%の順であった(図3)。

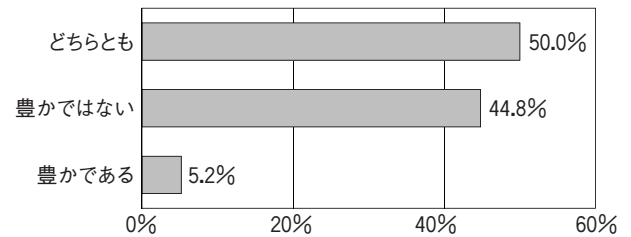


図3 暮らし向き

(4) 田畑の所有

田畑の所有に関しては、全体では「田畑があって自分が耕作している」が56.7%で最も多く、以下「持っていない」が31.0%、「田畑があるが自分は耕作していない」が12.3%の順であった(図4)。

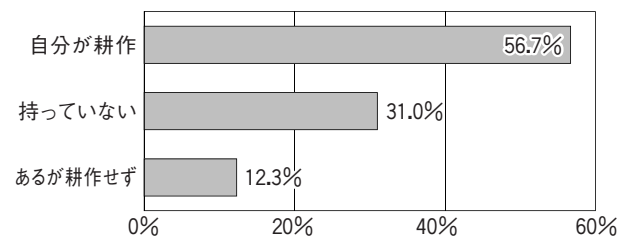


図4 田畑の所有

(5) 定住経歴

一宇での定住経歴に関しては、「生まれてからずっと」が69.8%で最も多く、以下「Uターン」が20.4%、「仕事・結婚で転入」が9.8%の順であった。圧倒的多数が一宇で生まれ・生活し・亡くなるというライフスタイルであることがわかる(図5)。

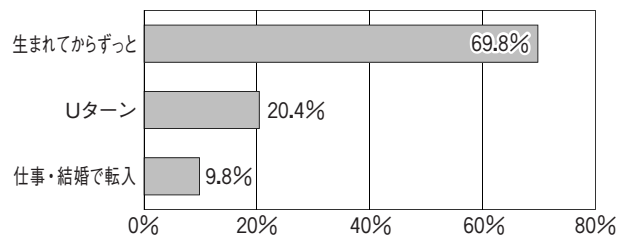


図5 定住経歴

(6) 家族構成

家族構成に関しては、全体では「一人暮らし」が42.5%、「夫婦のみ」が42.2%と同率である。「親や子と同居」は15.3%でしかない。

次に、同居していると回答した人に家族の人数を自身も含めて答えてもらった。その結果、平均で1.7人、最大6人であった(図6)。

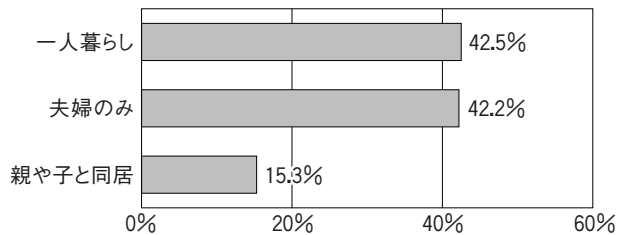


図6 家族構成

(7) 子の有無と同居/別居

子の有無と同居/別居に関しては、子が有る場合「遠く(つぎ町外)で別居している子どもがいる」が68.2%で最も多く、以下「近く(一字・つぎ町内)で別居している子どもがいる」18.6%、「同居している子どもがいる」13.1%の順であった(図7)。子どもの人数は、平均で2.5人、最大で10人であった。

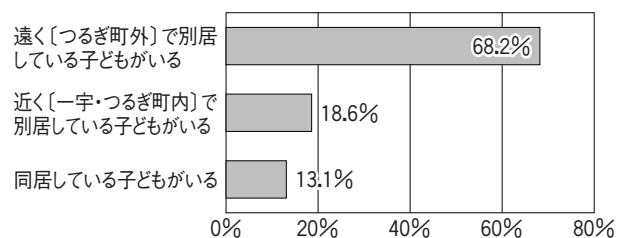


図7 子どもと同居・別居

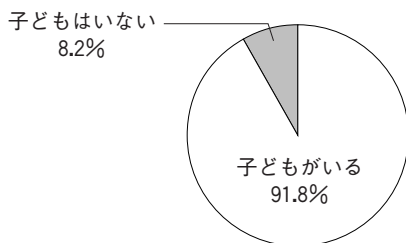


図7-2 子どもの有無

3. 一字住民の生活構造と生活意識

(1) 健康状態

健康状態に関しては、全体では「無理できない」がもっとも多く53.3%、「健康である」が28.1%、「病気がち」が18.5%であった。高齢化に伴い「健康である」との回答が少ないのが目につく(図8)。

「病気がち」が18.5%であった。高齢化に伴い「健康である」との回答が少ないのが目につく(図8)。

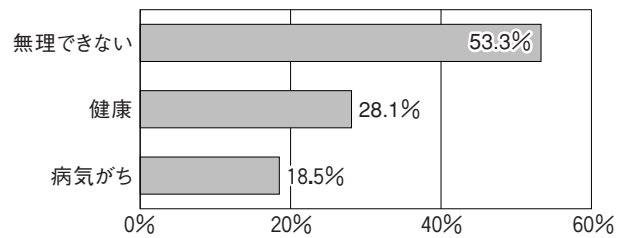


図8 健康状態

(2) 支援者

食料品のまとめ買いや通院の際の送り迎えなど支援者に関して質問した(複数回答)。

その結果、支援者としては「配偶者」が37.9%で最も多く、「友人・近所」と「別居の子」がともに24.3%、「専門業者・病院等」が11.4%と続き、「同居の子」が7.4%と最も少なかった。これは、一人暮らし(42.5%)や夫婦のみ(42.2%)の世帯が大半を占め、親や子と同居(15.3%)している世帯が少ないことから納得できる数値である(図9)。

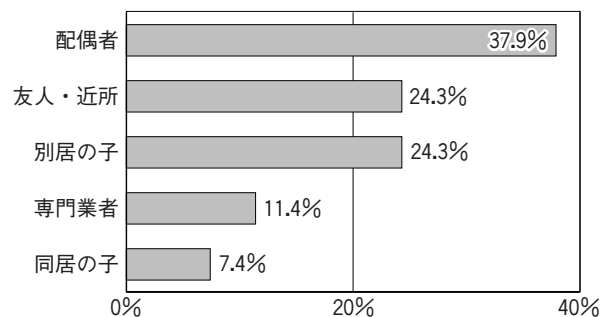


図9 支援者

(3) 相談者

電話をしてくれたり、プレゼントをしてくれたり、愚痴を聞いてくれたりする相談者については、「別居の子」が53.3%で最も多く、「友人・近所」が46.7%、「配偶者」が31.3%、「同居の子」が7.4%、「専門業者・病院等」が4.4%と続く(複数回答)(図10)。

「友人・近所」と「別居の子」は、約4分の1の人が道具的な支援者とし、約2分の1の人が相談者(精神的な支援者)としており、その重要性を伺うことができる(図9, 10)。

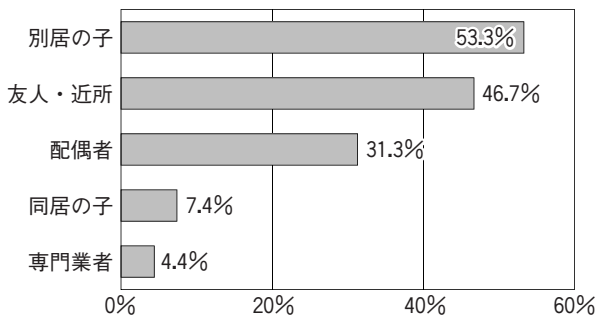


図10 相談者

(4) 生きがい

今、生きがいのある生活をしているかに関しては、全体では「ややそう思う」が47.0%で最も多く、以下「生きがいがある」が26.9%、「あまり生きがいはない」が22.0%、「生きがいがない」が4.2%の順であった(図11)。

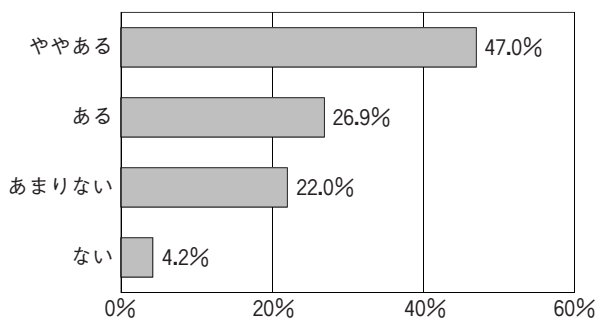


図11 生きがい

(5) 存在意義

自分はこの世の中でなくてはならない存在だと思えますかという問いに関しては、全体では「ややそう思う」が32.2%、「あまりそう思わない」が31.4%とほぼ同率である。以下「そう思う」が24.0%、「そう思わない」が12.4%の順であった(図12)。

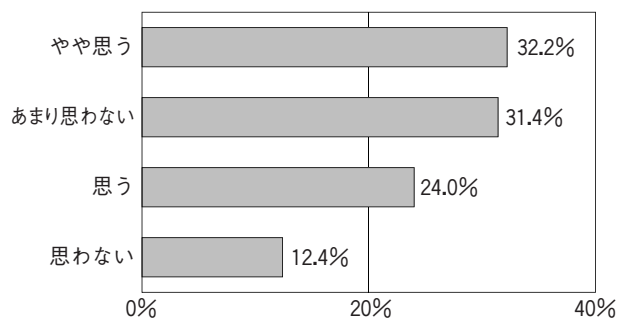


図12 存在意義

4. 一宇住民の生活意識の分析

—自己肯定観を中心に—

前章までで、一宇住民の基本的属性や生活意識をみてきた。そのうちでも、新たな町づくりの基本として、一宇に住む人々の生活の満足感や人生の充実度を知ることは特に重要だと考えられる。このことを見るために、「今、生きがいのある生活をしていますか」という質問と「自分はこの世の中でなくてはならない存在だと思えますか」の2つの質問に対して肯定的に答えた人が、充実し満足した地域生活をおくっていると考え、数量化理論2類による分析をおこない、その要因を探ってみた。

具体的には、この2つの質問に対する、「そう思う」、「ややそう思う」との答えを高得点とし、「そうは思わない」、「あまりそう思わない」との答えを低得点として、2つの点数を加算し、合計したものを「自己肯定感」と名づけた。そして、両方共に「そう思う」、「ややそう思う」と答えた人を「高得点者」、それ以外の人を「低得点者」として2つのグループに分類した。両方共に「そう思う」、「ややそう思う」と答えた「高得点者」は(表3)に示したように48.5%であった。

表3 自己肯定感 (%)

高得点者	48.5
低得点者	51.5

この自己肯定観の合計点が高い人を「自己肯定感が高い人」とし、それ以外のグループと分ける要因を数量化2類で探った。2つのグループの判別適中率は72.6%であった。

レンジ表(表4)は高得点者群と低得点者群の判別に大きく寄与した項目の順位を示している。カテゴリースコア表(表5)はプラスの数字が大きいほど自己肯定感を高めるカテゴリーであることを示し、逆にマイナスの数値が大きいほど自己肯定感を低くするカテゴリーであることを示している。

分析の結果、最も自己肯定感を高めるのに貢献している項目は、「暮らし向き」であり、「豊かである」ことがプラスに作用している。高齢者、とくに後期

高齢者がほとんどであった今回の分析では、暮らし向きが豊かであることが自己肯定感を高めることに重要な働きをしているといえる。

2番目には「家族構成」が「親や子と同居」であることがプラスに作用しており、「一人暮らし」であることがマイナスに作用している。高齢で一人暮らしをしている生活形態が自己肯定感を高く持つことを困難にしていることがうかがえる。

3番目には「相談できる友人・近所」があがっている。「相談できる友人・近所」が「いる」ことがプラスに作用している。信頼できる友人・近所の存在が自己肯定感を高めていると言える。なお、この数字は、以前調査した東祖谷よりも多かった。東祖谷が山間に家が散在する散村型の集落であったのに対して、今回の一字は県道剣山貞光線を中心に家が集まる集村型の集落なので、コミュニティとしてのまとまりが強い印象を受けた。東祖谷では、家族、特に子ども（遠くに住んでいても）の役割が大きかった。

4番目の「支援してくれる友人・近所」では、「いない」がプラスに作用していて、一見矛盾しているように思えるが、この結果は、友人・近所に頼まなくても支援してくれる人が傍にいる人の方が自己肯定感が高くなっていると解釈できる。

続いて「年齢」は「高齢（後期高齢層）」な方が、「定住経歴」では「生まれてからずっと」住んでい

る人の方が自己肯定感が高くなっている。

「仕事」、「参加集団数」、「性別」、「健康」状態は自己肯定感とは直接関係していないことがわかった。「仕事」は、東祖谷の調査では、判別に大きく貢献する要因であったが、今回は現れていない。調査対象が55歳以上の年齢層だったので無職の方が多く、影響が小さく出たと推測される。

表5 カテゴリースコア表

項目名	カテゴリー名	カテゴリースコア
暮らし向き	豊かである	1.79
	どちらともいえない	0.54
	豊かではない	-0.77
家族構成	一人暮らし	-0.36
	夫婦のみ	0.17
	親や子と同居	0.46
相談できる友人・近所あり	いる	0.40
	いない	-0.36
支援してくれる友人・近所あり	いる	-0.49
	いない	0.17
年齢	後期高齢層 (75歳以上)	0.24
	高齢層 (65~74歳)	-0.17
	向老層 (55~64歳)	-0.41
定住経歴	生まれてからずっと	0.16
	仕事・結婚で転入	-0.42
	Uターン	-0.35
仕事	農林業	-0.23
	非農林業	0.19
	無職	0.04
参加集団数	0~1個	-0.14
	2~3個	0.26
	4個以上	-0.14
子の有無, 同居・別居	子供はいない	-0.07
	同居している子供	-0.29
	近くで別居	0.01
	遠くで別居	0.06
健康	健康である	0.01
	無理できない	0.08
	病気がち	-0.26
性別	男	-0.12
	女	0.12

表4 レンジ表

項目名	レンジ	
暮らし向き	2.55	1位
家族構成	0.81	2位
相談できる友人・近所	0.75	3位
支援してくれる友人・近所	0.66	4位
年齢	0.65	5位
定住経歴	0.59	6位
仕事	0.42	7位
参加集団数	0.40	8位
子の有無, 同居・別居	0.35	9位
健康	0.34	10位
性別	0.24	11位

判別の中率	72.6%
-------	-------

5. 町村合併に対する住民の評価

平成15年8月、美馬郡合併協議会が合併前に旧3町村で「まちづくりアンケート」を実施している。

この章では、今回の調査結果と「まちづくりアンケート」の結果を比較することにより、合併前に住民が持っていた新しい町への期待と合併後の住民の意識を確認する。

1) 町村合併が良かった理由

今回の調査では、町村合併によって「つるぎ町」となり、「良くなった」（「良くなった」と「やや良くなった」の合計）と答えたのは42.6%、「悪くなった」（「悪くなった」と「やや悪くなった」の合計）と答えたのは57.4%である（図13）。

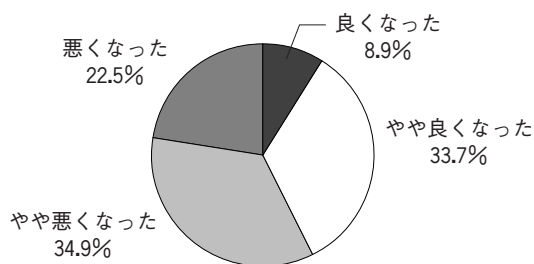


図13 合併に対する評価

「良くなった」と答えた人にその理由を質問した結果は次のとおりである（複数回答）。「生活道路の整備が進んだ」が48.2%で最も多く、「バスなどの公共交通機関が維持された」（38.2%）、「消防・救急体制が整備された」（36.4%）と続く（図14）。

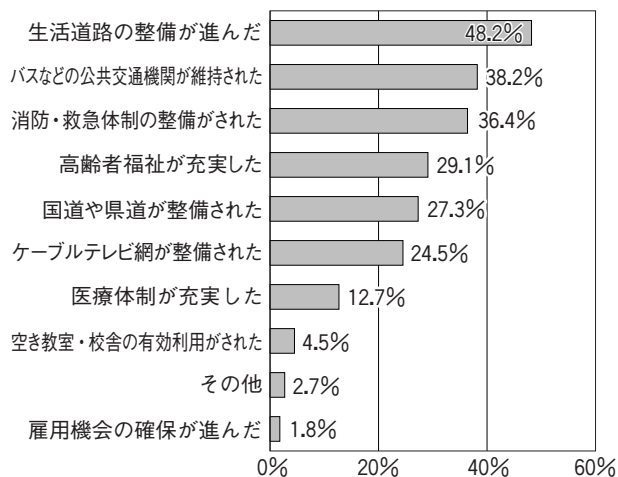


図14 良くなった理由

「まちづくりアンケート」では、「合併してできる新しい町に特に期待すること」として、一宇村では「国道や県道の整備」（71.5%）、「生活道路の整備」（70.3%）、「高齢者福祉の充実」（59.3%）、「ケーブルテレビ網の整備」（56.4%）などが高い比率であげられている（図15）。

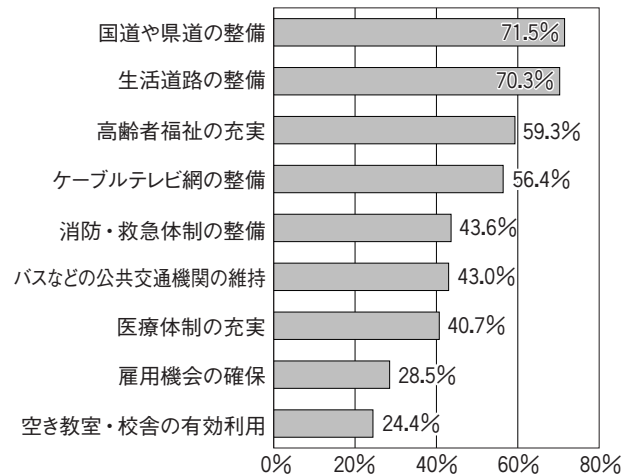


図15 合併に対する期待（「まちづくりアンケート」から）

合併前には、「道路の整備」に対する期待は70%を超えて高く住民が最も期待する内容であった。「道路の整備」は、合併後の評価でも、町村合併によって一宇は「良くなった」と答えた人の50%近くが、「良くなった」理由としていることから、町村合併及び町村合併後の「道路の整備」は住民のニーズにあった施策であったと一定の評価ができる。

2) 町村合併が良くなかった理由

次に、今回の調査で、町村合併によって「つるぎ町」となり、「良くなかった」と答えた人にその理由を質問した結果は次のとおりである（複数回答）。

「中心部だけが発展し、その他の周辺部が取り残される」が58.8%で最も多く、「行政区域が広がり、きめ細やかな行政サービスが難しくなった」（57.4%）、「公共料金などの住民負担が増えている」（37.8%）、「行政規模が大きくなり、住民の意見を行政に反映しにくくなった」（36.5%）と続く（図16）。

「まちづくりアンケート」では、「合併してできる新しい町に対しての不安」について質問しているが、一宇村は「中心部が栄えて周辺部が取り残されるのではないか」（65.7%）、「面積が広くなると行政サービスが落ちるのではないか」（44.2%）、「住民の

声が町の施策に反映されにくくなるのではないかと(43.6%)、「税金や公共料金の住民負担が大きくなりほしくないか」(37.8%)などの比率が高かった(図17)。

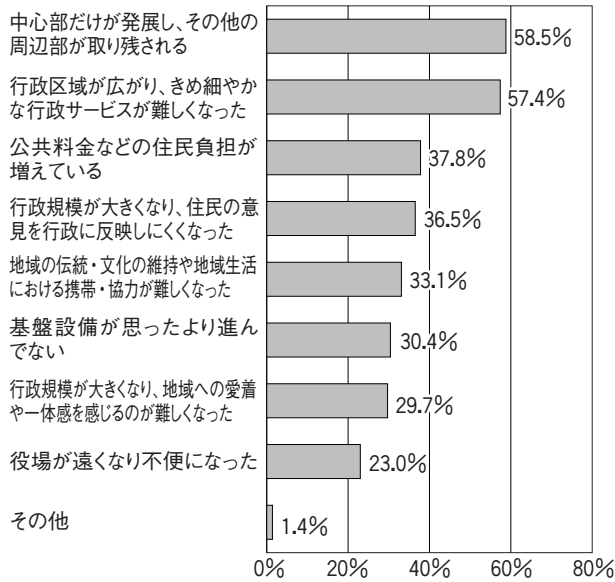


図16 悪くなった理由

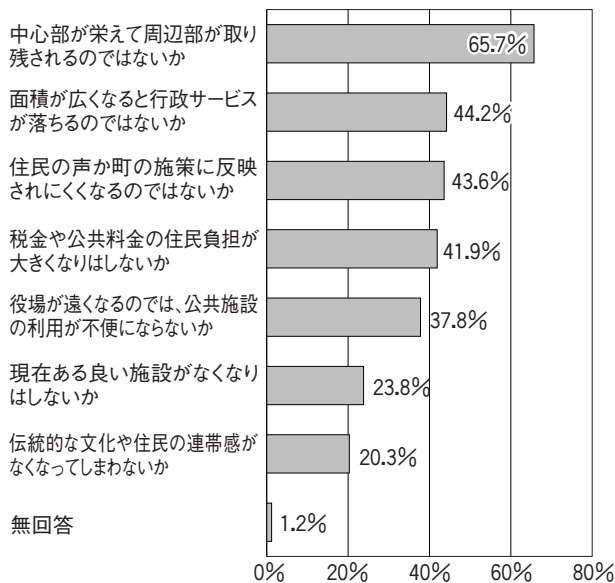


図17 合併に対する不安(「まちづくりアンケート」から)

合併前には「中心部が栄えて周辺部が取り残される」という不安、「行政区域が広がり、きめ細やかな行政サービスが難しくなる」という不安を一宇村の住民の約50%が持っていた。これらは、町村合併によって一宇は「悪くなった」と答えた人の60%近くが、「悪くなった」理由としている。

なお、広島県北広島町の合併に関する調査⁽²⁾で

も、合併が良くなかった理由として、「きめ細やかな行政サービスが難しくなった」(57.4%)、「住民の意見が行政に反映しにくくなった」(52.2%)、「周辺部が取り残される」(44.0%)、「地域への愛着や一体感を感じるのが難しくなった」(42.0%)などがあげられている(図18)。

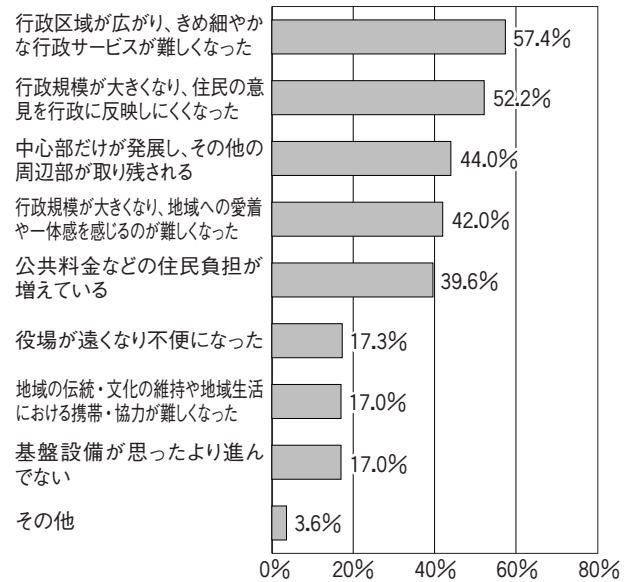


図18 合併が良くなかった理由(「地方からの社会学」から)

地域は異なるが町村合併が行われた地域では、町村合併が良くなかったとする住民の意識には、同じような傾向が見られることがわかる。

以上、合併前に一宇の住民が持っていた新しい町への期待と合併後の住民の意識を確認することができた。この結果については、今後の町政の参考にしていなければ幸いである。

6. むすびにかえて

我々の調査で明らかになったことは、次のとおりである。

分析対象の一宇住民の基本属性として、平均年齢が63.6歳と高齢化が進んでいるだけでなく42.5%が「一人暮らし」と家族形態も縮小している。

生活構造及び生活意識については、40%以上の人が「町内会・自治会など」、「老人クラブなど」に参加しているものの、53.3%が健康状態について「無理できない」と不安な気持ちを回答している。また、老後が経済的に安定し豊かであることが自己肯定観を高めている。

町村合併に対する住民評価については、「道路整備」が住民のニーズにあった施策であったが、他の合併町村調査と同様「きめ細やかな行政サービスが難しくなった」などの課題もある。

最後に、本調査にご協力いただいた関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

引用文献

(1) 桂 啓人・長澤寛二・近藤孝造 (2001) : 相生町の町 阿波学会紀要 第47号』阿波学会・徳島県立図書館, 312頁.

(2) 山本 努 (2008) : 『地方からの社会学』学文社, 160頁.

参考文献

山本 努 (1996) : 『現代過疎問題の研究』恒星社厚生閣.

金子勇編 (2002) : 『高齢化と少子社会』ミネルヴァ書房.

直井道子 (2001) : 『幸福に老いるために一家族と福祉のサポート』勁草書房.

杉岡直人 (1990) : 『農村地域社会と家族の変動』ミネルヴァ書房.

前田信彦 (2006) : 『アクティブ・エイジングの社会学—高齢者・仕事・ネットワーク』ミネルヴァ書房.

A survey of the life structure and life consciousness in Ichu area of Tsurugi-Cho, Tokushima.

NAGASAWA Kanji, KATSURA Hiroto, KONDO Kozo.

Proceedings of Awagakkai, No.57(2011), pp.189-196.